



令和6年産（5年播種）

麦類の生育概況 vol.3

埼玉県マスコット
「コバトン」

（令和6年2月8日現在）
埼玉県農業技術研究センター

要約

- ◎気象概況：1月の平均気温はかなり高く、降水量は平年並であった。
- ◎生育状況：11月播種のほ場では、生育は旺盛で全体に早まっている。晩播ほ場では、生育量が少ない傾向にある。
- ◎今後取るべき技術対策
 - ・踏圧(麦踏み)：麦の生育状況に応じて、莖立期までに10日～2週間間隔で2回程度を目標に実施する。
 - ・追肥：生育と麦種に合わせた追肥を実施する。
 - ・排水対策：排水機能を保つよう明きょと排水溝の点検補修を行う。
 - ・雑草防除：雑草が発生し始める条件となってきたため注意する。発生したほ場では雑草の種類と葉齢を確認した後、適期に防除を行う。

1 気象の概況

1月の平均気温は、第3半旬が平年並であった他は高温傾向にあり、月平均では1.4℃高かった。降水量は、21日に27.0mmのまとまった降雨があり、月合計では平年比88%であった。日照時間は、第1、第5半旬が少なく、第2、第6半旬が多く、月合計では平年比105%であった。

2 生育の概況

(1) センター内生育相

ア 小麦（さとのそら：11月24日播種）

12月までの生育が進んでいたことに加え、1月が全般的に高温であったことから、葉位の進展は平年（令和2～4年播種の3か年平均）よりさらに早まり、莖数は平年を大きく上回っている。積算気温から莖立期を予測したところ、平年より4日程度早いと予想される。

イ 大麦（彩の星：11月24日播種）

小麦同様、生育は進んでおり、葉位の進展が早く、草丈はやや長く、莖数は平年を大きく上回っている。積算気温で莖立期を予測したところ、平年より9日程度早いと予想される。

(2) 県内全般

11月播種のほ場では、発芽、苗立ちが良好で初期生育も順調で2回目の麦踏みが行われているほ場も見られる。12月播種のほ場では、乾燥により出芽までに日数を要した。

播種後気温が高めに推移していることと、1月20～21日にかけてまとまった降雨があったことから適期播種のほ場では生育が旺盛で肥料吸収量も多くなっている。しかし、晩播ほ場では分げつなど生育量が少ない状況となっている。

3 今後の生育予測

(1) 気象予測

気象庁の1か月予報(2月8日発表)では、平均気温は高く、降水量及び日照時間はほぼ平年並と予報されている。

また、3か月予報(1月23日発表)では、気温は3月は平年並みか高く、4月はほぼ平年並。降水量は3月、4月ともほぼ平年並と予報されている。

(2) 生育予測

向こう1か月の平均気温が高く、土壌水分も確保されていることから、生育は旺盛となり莖立期などの生育ステージも早まることが見込まれる。

適期播種されたほ場では、最高分げつ期に向けて莖数の増加が順調で有効莖の早期確保が見込まれる。しかし、晩播ほ場では、分げつ開始時期が遅れたことから、前年のように莖数が少ないまま莖立期を迎えることが見込まれ、今後の気象条件によっては遅れ穂の発生が懸念される。

4 今後取るべき技術対策

(1) 麦踏み

耐倒伏性や耐寒性の向上、分げつや根の発生促進を目的に、ローラーに適度なおもりを載せて丁寧に行う。莖立期までに10日～2週間の間隔を空け、2回程度を目標に実施する。

莖立期間際の麦踏みは過剰分げつなどの弱小莖を抑制する効果があるが、必ず莖立期前であることを確認して麦踏みを行う。また、土壌水分が高くローラーに土がつくような場合には麦踏みは行わない。

【参考】さとのそらの場合は偽莖長が7cmに達した頃が莖立期(稈長2cm)にあたる(偽莖長とは平均的な株の地面から最上位の展開葉の葉節(葉耳部分)までの長さ)。

(2) 追肥

小麦は、「さとのそら」の追肥体系では出穂2週間前(平年4月上旬)に窒素成分で3～4kg/10aを目安に施用する。ただし、莖立期後の機械散布が困難な場合は、莖立期直前(平年3月上中旬)に実施する。「あやひかり」は窒素成分で2kg/10a(平年2月下旬から3月上旬)を施用する。

ビール麦は、前年産のタンパク質含有率分析結果から施用量及び施用時期を調整する。高タンパク質の指摘があった場合は窒素成分で 1.5~2kg/10a（平年 2 月上旬）、低タンパク質の場合は窒素成分で 2kg/10a（平年 2 月下旬）を目安に施用する。

六条大麦は、窒素成分で 1.5~2kg/10a（平年 2 月中下旬）程度施用する。

本年は生育が早まる傾向にあるため、平年よりも 10 日程度早めに作業の準備を始め、ほ場をよく観察して生育状況に応じた適期施肥を心がける。

（3）排水作業

近年まとまった降雨や降雪が多いことから、排水溝の不備は湿害を招きやすい。麦踏み等で明きよが埋もれていないか、外部の排水路と連結されているか等を確認し、不備があれば速やかに補修する。

（4）雑草防除

この時期は雑草が小型で暗緑色や赤褐色を呈し、雑草の草丈が伸びずに葉齢が進むため、土壌と識別しにくい。このため、発生始期の見逃しや、防除適期を過ぎてしまう危険性がある。雑草の種類と葉齢を確認し、処理適期を逃さぬよう確実に除草剤散布を行う。

（5）病虫害防除

昨年東北地方で出荷された小麦から食品衛生法で定める安全基準を超えるカビ毒が検出され問題となった。生産者段階では、赤かび病の適期防除、高水分麦の収穫は避ける、収穫後は麦を高温多湿条件に置かず速やかに乾燥作業を行うなどの対策が必要である。

赤かび病の防除適期は地域や麦種によって異なるが、3月下旬から4月下旬頃である。県内では共同防除を行なっている産地が多いので、早めに防除計画を検討し防除体制を整える。

解析・考察に用いた具体的数字

1 1月の気象表（熊谷気象台日別測定値から集計）

半旬	平均気温(°C)		最高気温(°C)		最低気温(°C)		降水量(mm)		日照時間(hr)	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1	6.4	4.6	12.3	10.4	1.0	-0.1	0.0	3.5	30.9	36.0
2	5.3	4.4	11.9	10.0	-0.5	-0.3	0.0	4.2	44.0	35.7
3	4.2	4.2	10.5	9.7	-1.3	-0.4	0.5	6.0	35.8	34.6
4	6.2	4.1	11.2	9.4	1.4	-0.5	4.5	7.0	33.1	33.6
5	6.3	4.1	11.3	9.5	2.5	-0.5	27.0	7.0	28.3	33.8
6	5.9	4.2	12.3	9.8	0.8	-0.5	0.0	8.2	55.3	42.8
平均	5.7	4.3	11.6	9.8	0.7	-0.4	合計 32.0	36.5	227.4	217.0

注1. 半旬数値は熊谷気象台日別測定値から集計。ただし、月平均、合計値は気象台値。

2 生育状況

品 種 名	調査日	草 丈		茎 数		葉 位		風乾重		風乾歩合	
		本年 (cm)	平年比 (%)	本年 (本/株)	平年比 (%)	本年 (L)	平年差 (L)	本年 (g/100本)	平年比 (%)	本年 (%)	平年差 (%)
さとのそら	1月5日	10.2	98	2.1	211	3.3	0.9	6.1	145	22.2	-3.2
	1月15日	10.0	94	3.4	216	4.1	1.2	9.6	174	24.3	0.8
	1月25日	9.8	95	5.0	191	5.1	1.5	14.4	180	22.3	-2.6
彩の星	1月5日	11.3	107	3.0	158	3.3	0.8	9.1	151	16.7	-1.0
	1月15日	11.6	107	4.5	170	4.3	1.0	15.5	194	18.2	2.7
	1月25日	12.0	105	6.7	175	5.1	1.1	21.3	172	16.9	0.1

注1. 平年値は、さとのそら、彩の星とも暖冬であった令和2～4年播種の3か年平均。以下同様。

注2. 風乾重は100個体当たりグラム。風乾歩合は風乾重／生体重。

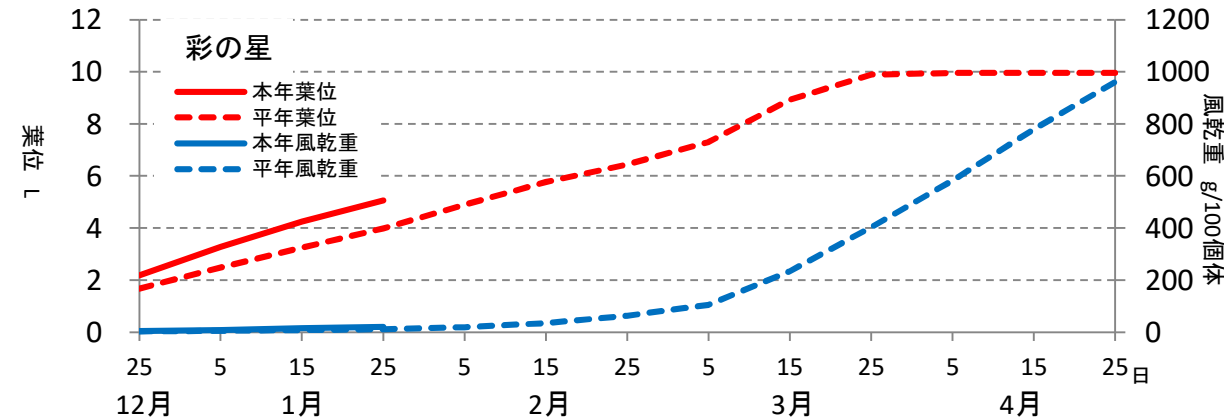
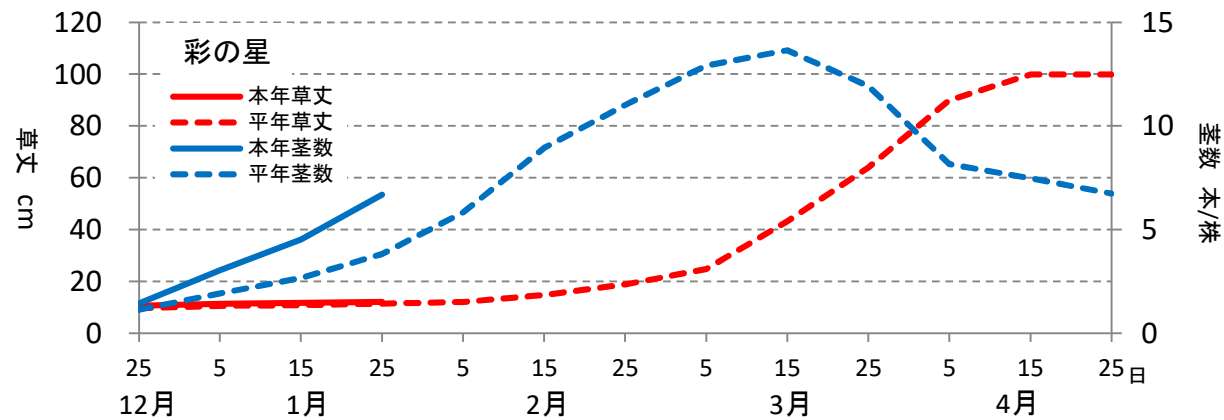
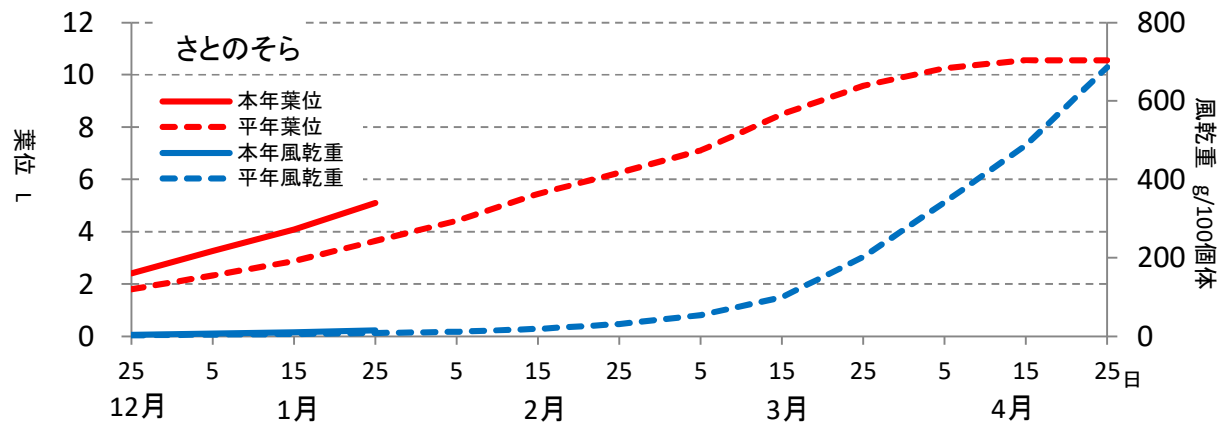
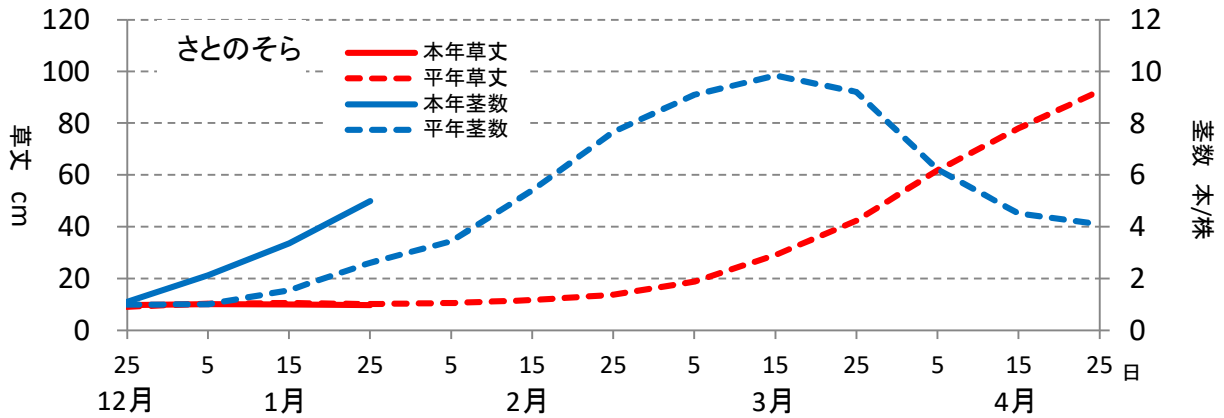
3 茎立期の予測（11月24日播種）

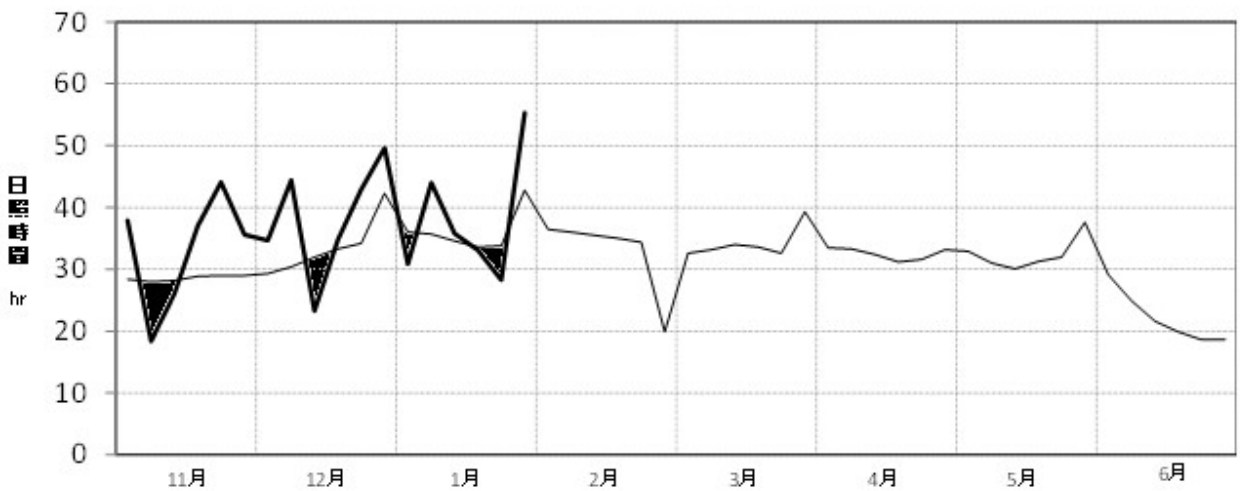
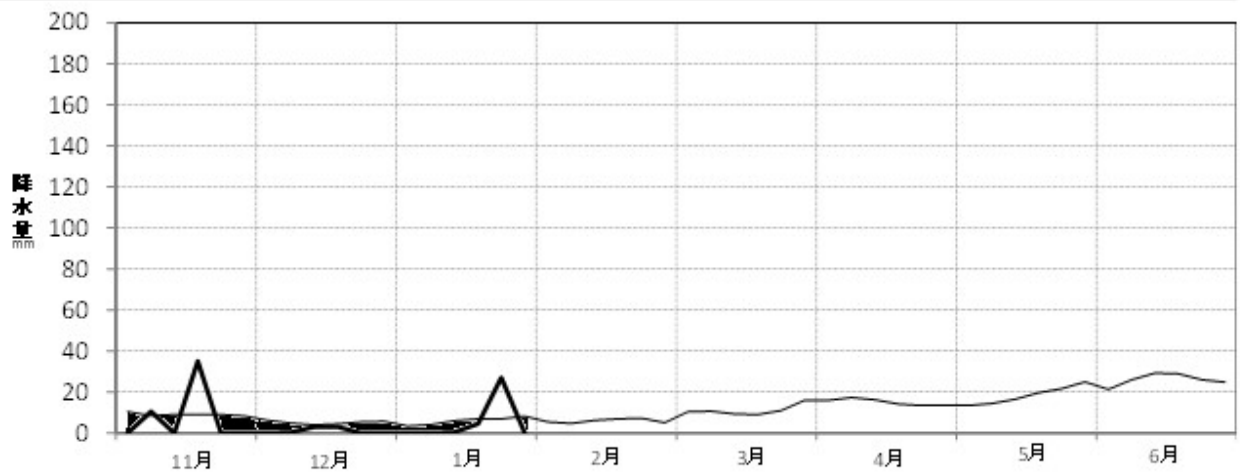
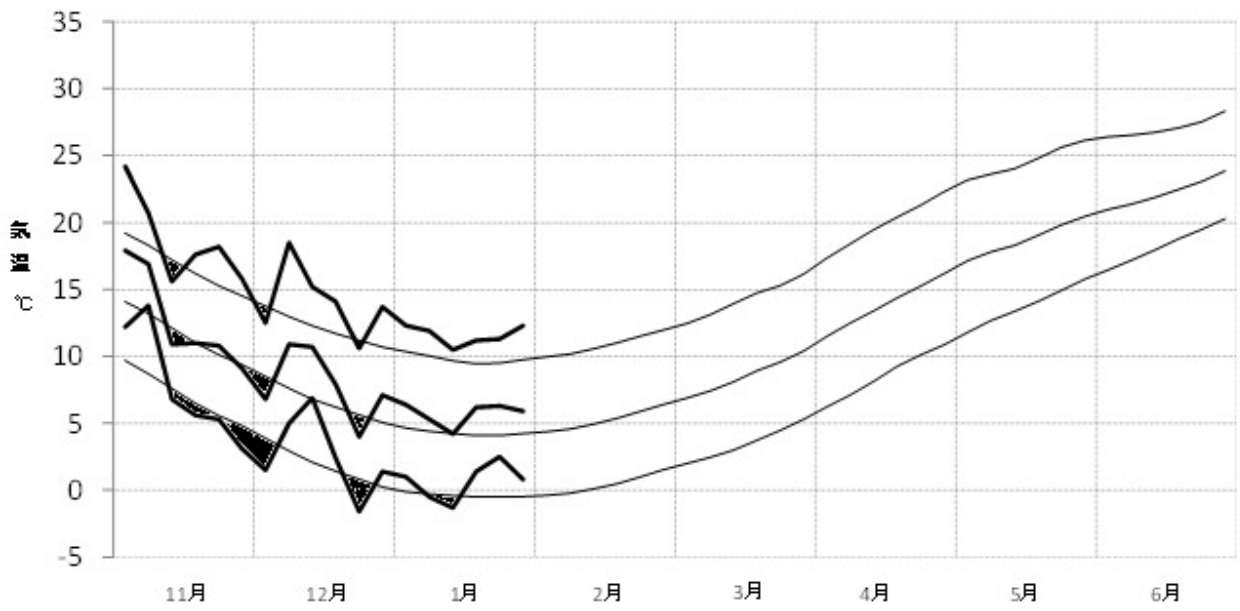
品種名	平年値		積算気温から予想される 本年の茎立期
	茎立期	播種日からの 積算気温	
さとのそら	3月14日	703	3月10日
彩の星	3月6日	607	2月26日

注1. 積算気温は平年値、本年とも麦調査年における熊谷地方気象台日平均気温の積算値を使用。

注2. 本年の茎立期予想には1月31日までは実測値、2月以降は平年値の日平均気温を使用。

4 生育経過（11月24日播種）





令和5年播(6年産)冬作期間気象図
(熊谷地方気象台日別データより作成)